

呑川レポート 2015-6

なにが真実か？その 3—魚の大量死補足

前回の「(呑川レポート 2015-05)なにが真実か？その 2 (魚の大量死)」について、感想や質問をいただきありがとうございました。次回のレポート発行時にお答えしようと思いましたが、忘れてしまうといけませんので、とりあえずのご返事としたいと思います。

1) 都の「プレス発表」のページ。”「東京都のプレス発表」のページが見つからなかった”との質問がありました。東京都の HP は、大田区と比べれば膨大で、たしかに私も苦労しました。最新のプレス発表は下記ページにあります。<http://cgi.metro.tokyo.jp/aps/press/inet.cgi> この「プレス発表」の一つ一つを紹介し、説明するのは長くなるのでやめますが、これを見ると、呑川以外の他河川でも魚の「へい死」があちこちで起きています。

そして「1000 匹」もの「大量死」でも、「溶存酸素」の低下が認められず、「酸欠死」でなく、「原因不明」と表記されているものもあります。(青梅市を流れる霞川など) これだけの魚の「大量死」が、「原因不明」のままになっているのは残念な気がします。ただ、「都」としても「酸欠死」とは言えない「へい死」があることを認識しているようです。

「へい死」以外にも興味深い内容がありますので、時々チェックして、河川関連の報道発表を見てくださればと思います。

2) 「へい死」を起こさないための、呑川の環境改善について

「へい死」が起きるのは、呑川の環境が悪いためなので、それを改善するいくつかの提案をしてくださった方もいます。実は、先日、大学の先生にご相談する機会があったのですが、「環境だけのためには、河川改修の予算が付かない・・・」とおっしゃっていました。現時点では、「治水」や「耐震補強」と組み合わせてしか、実現する方法が無いようです。それが現実であれば、そういう視点で考えるしか、早道は無いのかもしれませんが。「呑川ランドデザイン」も、そういう視点で物事を考える訓練が必要な時代に入ってきているのでしょうか・・・

3) レポート表現の「むつかしさ」について。

前回のレポートは「難しかった・・・」との感想もいただきました。おそらく、私の説明が独りよがりだったのでしょう。申し訳なく思います。今後は、次の 2 点に力を入れて改善しようと思います。

(a) 数字の「意味」を明確にする。

前回のレポートで、「酸欠死」を明確にするため、いくつかの「数字」を挙げました。

しかし、「溶存酸素 (DO)」が「**mg/L」などと数字が出てくると、「難しい」と感じ、イヤになってしまう方も多いと思います。安易に数字を上げるのは、拒否反応を起こされる方もいますので、良くないと感じました。

ただ、前回の解説では、

(魚が生きて行くには、DOが「2mg/L」以上必要とされています)

と、「数字の意味」を明確にした上で、「溶存酸素(DO)」が「2mg/L」以上あったのに、なぜ「酸欠死」したのだろう?・・・と、疑問を投げかけたのです。今後とも「数字」を挙げる時には、必ずその「意味」を明確にして判りやすい説明することに留意したいと思います。

(b) 判りやすい写真表現に力を入れる。

「新版・呑川は流れる」の発行準備にあたって、「定説」にこだわると、「行政」の資料の解説ばかりになってしまうので、「呑川の会」のメンバーによる「市民研究」を大切にしたいと思っています。ただ、「定説」にこだわらない問題を追及するだけでなく、「判りやすさ」にも力を入れ、とりわけ「写真」の撮り直しを始めています。

例を挙げましょう。「呑川」の「問題点」や「将来課題」の一つに、呑川沿いの道を、「車」の通行を気にしないで歩ける「遊歩道」にしたいと言うのは、みんなの願いです。そのことを「車を通行止めにして・・・」など書いても、「車が通らなければ、安心なのは当たり前」で、特に目新しくなく、「注目すべき課題」として、関心と呼ばないでしょう。また、資料として「遊歩道にするための道交法上の問題点」をあげても、そこまでは見る方は少ないでしょう。特に、呑川沿いの道を知らない方には、なおさらです。

そこで、「呑川沿いの道」の写真を紹介します。



これで、「呑川沿いの道」のイメージは湧くでしょうが、「樹木がいっぱいあると涼しくて良いだろうな・・・」くらいの印象で、「遊歩道化の必要性」が浮かび上がってきません。

これでは、気持ちが伝わらないと、苦勞して撮った写真があります。



子どもたちがたくさん歩く「呑川沿いの道」に、「車」が連なってドンドン走り、「自転車」もその「車」をよけながら走り、子どもたちは、さらに、それらをよけながら歩くのです。こういう実態を見ると、「車の走れない遊歩道化」は「緊急」の「重要課題」として浮かび上がり、誰もが心に残ります。

まして最近では、「子どもの列に、車が突っ込んで、死傷・・・」などという報道が絶えませんから、なおさらです。「いつ事故が起きても、おかしくない」実態写真を見れば、「もう、まったなし!」と思われる方も多いでしょう。今ここで、にこにこ笑って歩いている子どもたちが、いつ悲惨な目に遭うかもしれないのです

こう感じた時、では「遊歩道化」するには「どんな問題があるだろう・・・?」と「資料編」にも関心を向けてくださるかもしれません。それが「判りやすさ」なのだと思います。

もちろん、現場に行けば、すぐ「問題点が浮かび上がる」写真が簡単に撮れる訳ではありません。いま、少しずつ「撮り直し」を進めていますが、会員みんなの努力で、現場を良く見つめ、写真を「撮り直し」必要を感じています。それも意識的に進めないと、すぐ数年はかかってしまいます。

今回、思わぬ「判りにくい」という感想をいただいて、とりあえず2点の改善を考えましたが、ますます、そういう努力の必要性を認識しました。

(呑川の会) 高橋 光夫
